第３回森林再生実行会議　議事録(全文)

令和３年 11 月 23 日(火・祝)13：30～15：30
松本市役所　本庁舎　大会議室

（事務局）

定刻となりましたので、ただいまから第 3 回松本市森林再生実行会議を開催します。

本日の会議は、YouTube 松本市公式チャンネルで配信しております。会議の終了は、概ね午後 3 時 30 分を予定しております。それではここからは、香山座長に進行をお願いいたします。

（香山）

YouTube でご覧になっている皆様、第 3 回の森林再生実行会議ということで、これから始めていきたいと思います。

1 回目、2 回目と進めてきた中で、3 回目そろそろどういう形に、この話を進めていくのかなという、具体的なことに進んでいくのですが、2 回目会議の時に、小山委員から、市に宿題というか、ちょっと調査してくださいっていうことを出されていますので、まず、市からその報告をいただきたいと思います。

（事務局）

お手元にお配りした資料とホームページにアップした資料は、資料 1 と資料 2 と、最後に松本市基本構想 2030 市民会議ということで三つお配りしています。

最初に資料 1 をご覧いただいて、これは小山委員から照会のあった庁内での会議、市民が関わりました会議において、森林や自然環境とエネルギー等について意見等どんなものがあったかということで、過去 3 年間にわたりまとめたものが資料 1 です。

7 つの会議からまとめまして、いろんな意見をいただいていますが、山崩れの心配ですとか、材を利用して欲しいですとか、そのような意見がありました。

また、資料 2 は市民が自然や森林と触れ合う施設ということで、キャンプ場、遊歩道、都市公園についてまとめたものが資料 2 です。一番目は市内のキャンプ場で、公共の施設、民間施設がございます。二番目が市内の遊歩道で、市内の広い範囲で、山林、森林の中に遊歩道が 18 か所程あり、また、別に遊歩道のマップということで、カラー刷りのものをお配りしていますが、森林の中を歩けるものがあります。三番目では都市公園ですが、当然街中にある公園や、アルプス公園、弘法山古墳公園などがあります。

また、資料 3 は、先ほどの資料 1 の中の市民会議からの意見整理の抜粋版ですが、これもホームページにアップしているものの抜粋版を資料として添付しています。

（香山）

今までの会議の中で、市民の森林の接点というのがなかなか難しいという話が出てきた中で、実際、今の松本市の行政として、市民と森林との接点としてどういうものがあるのか、実際にはもっといろんなことがあると思いますが、文書の形としてあるものということで、渡していただいたということだと思います。

実を言うと、いわゆる文書の形というところでないところで言いますと、公民館の行事であるとか、いろいろあるのですが、これをなかなか網羅的に調べるというのは難しいということもありましたので、今回はこういう文書の形になっているものだけを出していただきました。

早速、小山さんから、これに対して、いろんな考えというか事前に資料を見ていただいていると思いますので、よろしくお願いしたいと思います。

（小山）

事前に見せていただいた資料の中で、すごく面白いなと思ったことがあります。

本日配布されている資料の中で、1番から6番までというのが、いわゆるいろんな会議の審議会や研究会、説明会、懇談会といった、いわゆる森林に関わる関わらないは関係なく、様々な部会のそれぞれの課題を解決するというところで、森林という文脈がどう使われているのかなっていうのが、1番から6番ではないかと思いますが、こういった、要するにそれぞれの目的がある関係の中で森林がとらわれているのは、逆に言えば、それだけ森林に重要性があるのかってことになるかと思うのですが、そちらに関して言うと、一部地区の松くい対策の協議会では、かなりいろんな文脈が出てきているようですが、それを除けば非常に少ないというのが一方で言えるのではないかと考えますと、松くい虫対策ということを除けばあまり皆さんの中で森林に焦点が合わさっていない。

要はそれぞれの問題の中でその後ろにある森林というのがあまり大きなターゲットにはなっていないのだな、それが前回の会議で出た市民との距離が遠いという部分になっているのではないかというふうに感じました。

一方で非常に面白かったのが、それに変わりまして、松本市基本構想で市民会議が出てきている中では、非常にいろんな分野、今回もご報告いただいておりますけど自然環境、都市環境、農林業、エネルギー、教育とですね、かなり幅広なところで、森林がちょっと大事じゃないのということを引っ張り上げているということは、目の前にあるいろんな課題に対して対処するときには、あまり重大な意識はないが、今回の基本構想2030でちょっと先のことを見据えたときには、ちょっと外せないぞというふうに皆さんが思っているっていうところが、非常に面白い結果として出てきたのではないかと考えています。そうしますと、今回私たちが目指そうとしている森林再生という時には、目先のものよりも少し遠い時に、皆さんが何となくちょっと考えてるねというところにターゲットを絞っていくと、幾つか見えてくるのかなというのがちょっと感じるところです。

（香山）

小山さんの意見について、我々の方でも実は小山さんから事前に投げていただきまして、それに対する反応ということも含めてですけれども、では三木さんお願いします。

（三木）

今日配布されている松本市の資料を拝見しまして、結構いろいろ調べられてるなという感じを受けました。

特に先ほど小山さんがおっしゃったように、基本構想2030市民会議の中でいろいろと、森林に関わることが述べられているのは私も重要だと思ってまして。森林との関わりのない松本市っていうのはないよねっていう認識はあるのではないか。2030年、2040年ぐらいの中長期のところでは、

森林と関わりのある松本市を作っていくのは、方向性として、市民の感覚からもそんなにずれていないんじゃないかなと感じました。

他には、遊歩道の図を頂いて、これだけあるのだなという感覚を受けました。

ただ、やはりこの地図を見ますと、これは松本市の地理的な構成で仕方がないのですけど、市街地からやや遠いですよね。全体的に。そのあたりが、市民との実際の森林との距離っていうのをちょっと遠くしている一つの要因かなと思いました。

（渡辺）

資料で頂いたもの拝見させていただいたんですけれども、いろんな会議をもとに、松本市の方と、市民の方々がこういった議論をされてきた中で、意見交換が行われていたんだなっていう印象を受けました。

私自身、松本市民ですけども、恥ずかしながらこういった会議が行われていたこと自体が、私自身認識がなかった部分もあり、参加された方々には、こういった課題意識だったりとか、これからもっとこうしていけたらいいなっていうところを、市役所の方に意見を上げていただいてるなっていう部分を感じました。

また、先ほど小山さんがおっしゃっていたように、中長期の部分で森林って松本市の部分で外せないよねっていうところももちろんありますし、一方で市民としてもっと私自身、木が好きなのでみんなにもっと松本市の木の魅力だったり、身近で例えば木のまな板もそうですし木のアクセサリーとか、キャンプもそうですけど、毎日とはいかないかもしれないけど、日常に溶け込むような木の関わり方がもっとできたらいいなっていう印象を受けました。

（香山）

私も松本の森林との関わり、仕事での関わりが実は中心でずっと林業のことやってたんで、松本市の市民との関わり、市民との政策の中で森林がどうなっているかは、今回初めていろいろ知ることができたのですが、その中で印象的だったのは、いわゆる会議の場ではなかなか森林っていうのがテーマになりにくい。言ってみれば松本にとって森林ってのは当たり前の背景であって、ただそこで一つ最近になって松枯れということが出てきて、多くの人たちが注目していて実際にこの松枯れ対策の会議というのが開かれて、そこで、実際にここに書かれている言葉だけではなくて、空中散布の問題を初めとして、大きな議論を生んできたと、そういうことがあったと思うのですね。ただその松枯れのことを除くと、やはり森林との触れ合いっていうのはなかなかない。

基本構想の話になると、確かに将来の話でそうやって考えるとやはり背景である森林のことがすごく大事だ、これは外せない、まさにそうだと思うのですが、じゃあ、私たちが日常の中でどれだけ森林を意識しているのかっていうとなかなか遠い。

その辺が、今の松本の状態、いやこれ、おそらく松本に限ったことじゃなくて、多くの地域が、実はそうなんだろうなっていう気がするのですが。

森林に１番興味を持っていて、仕事で関わってる林業の人を除いては、なかなか遠い。そういうものなんだと改めて確認したような気もします

ただ一方で今回、小山さんからの課題の後に市の方とお話ししている中で、今実は、森林へのってちょっと正確かどうかわからないが。実は、自然への意識かもしれないんですけれど、キャンプ

というのはすごく流行っていて、キャンプブームと言われていますよね。

ソロキャンプっていうような需要もあって、もうキャンプ場だけじゃ面白くない、足りないということで森林を自分のプライベートのキャンプ場として買おうという人が出てきて、それのガイドのための冊子みたいなものが 2 種類ぐらい出てるんですね。不動産としてそういう注目があると。

実際、私の親しいところでもそういう目的で山を紹介してくれないかってそういう話もたくさん来ています。

そのぐらい、またちょっと森林なのかどうかわからないけれど自然環境ということになると、この地域にはどうしても森林になるので、そこに関わりたいっていうそういう意識は上がっている。それに対して、なかなか行政的な立場として答えるチャンネルができてないのかなっていう気がしました。

私は大町市で暮らしてるんですが、安曇野、大町、白馬そのエリアに行くとキャンプ場ってほとんど民間の経営で行われているんですね。松本は公設のキャンプ場が非常に多いっていう事が今回分かって、随分その辺は地域性なのかなという気がしたところです。その中で遊歩道の話に繋がっていって、遊歩道は実にたくさんあるというのがわかりました。ただ私も松本の遊歩道って歩いたことがないんですね。

なかなか遊歩道ってどういう人がどういうタイミングで歩くのかよくわからないんですが、私自身はほとんどが歩いたことがないです。仕事で行くのは、遊歩道みたいな整理されたところではない道なき道を歩いて、これから道を作るみたいなことはやるんですが、遊歩道的なこと私自身が直接関わって整備したのは大町市で 1 ヶ所だけあるんですが、なかなか市民との繋がりですごくいい接点に使われていないのかな、或いは使ってる人っているんでしょうけど、どういう関わりかっていうのはわからないな、そんな気がしてるところです。

昨年の提言の中で、一つのポイントとして里山での市民との関わりっていうことが言われた中で実際に、いわゆる里山っていうところと、キャンプ場とか遊歩道がある所ってどうもずれてるのかもしれない。そんな気もしてるところです。その辺も含めて、小山さんはいろんな形で市の政策的なことにも、関わっておられる部分もあるし、環境教育的な形で市民との接点をいろいろ持っておられると思うんですけど、小山さんから見てキャンプとか、遊歩道とかその辺っていうのはどんなふうに捉えてますか。

（小山）

いろいろ大きな宿題をいただきましたが、まず頂いた資料を見たときに、皆さん歩いてないよっていうんですが、実は私自身が歩いてないとこどこかなと探すと、私が歩いてないとこどこかっていうと多分、梓川の遊歩道それだったかな？長尾は歩いてないなっていう感じなんで、実は歩いてます。

ただ 1 回歩いたもしくは一部歩いたというのがあるんですが、正直言いまして、もう 1 回歩こうかとなった時に魅力的なコースが残念ながらないというのが一つ問題ではないかなと。遊歩道としては整備してあるんだけれど、例えば松本の皆さんというのは基本的に、公共交通を利用して歩かれるケースが非常に少ない。一方で公共交通を利用して歩いた場合に、どの遊歩道でもいいんですが、一番歩きやすいのが多分、松本市で整備されている中では上高地ではないか。次は乗鞍ではないか。というのは、どちらもスタートとゴールがしっかり分かっていてそこからぐるっと回って戻

って来れるコースがあるのが多分、上高地と乗鞍。美ヶ原に関して言えば広いコースがあるんですが、多分、今の状態で公共交通で行けるところが非常に限られているので、公共交通で行ってどこから行ってまた別の公共交通で帰って来れるというところが美ヶ原の場合は限られてしまう。それが多分他の交通、他のところもそうであって、さらに、その道の大半が一方通行になっていて、行って帰ってくるというコースしか組めない。

今年行った中では虚空蔵山に登ったんですが、行って別の場所に降りようとすると公共交通がないので、ぐるっと回って歩いて帰ってくるか行った道を降りるしかないという状況になっているというのがいわゆる遊歩道としてゆっくり歩いて散策してというにはちょっと厳しい道が多いなというのが正直な感想です。そういった意味で遊歩道は道自体もきちんと歩きやすかった所ばかりじゃないのでその辺が課題かなとは思います。

もう一方で、先ほどこういう市民の云々っていうのがあったかと思うんでが、実際こういうところでそういう環境教育とか、他の分野でもいろんな熟年体育大学ですとか、いろんな活動をいっぱいやられてると思うんですが、そういった活動が果たして森林の中というエリアに来ているのかどうか。

例えば遊歩道を使った中で、そういう観察会、公民館行事もたまにやってるようですが、そういったものが生かされているのかどうかって考えるとやはり、香山さんが心配されてたように、背景としてはあるけれども、私たちの森の中では近さがないかなと。

前回もかなり問題になったかと思うんですが、何となく森はなきゃ困るよねって言いながらも自分たちが行かない、今年も歩いた中で人に出会ったのは、虚空蔵山だけですので、虚空蔵山は本当に土日しか私も歩かない人間なんですが、そういうときに 3 名出会ったのが虚空蔵山で、あと今年行ったのが鉢伏のところと、美鈴湖それから芥子坊主、大音寺と歩いているんですがそこでは出会っていませんので、比較的やはりマイナーなのかなという気はしてます。

（香山）

さすが小山さんですね、これだけ遊歩道歩いてる人ってあまりいないんじゃないかな。おそらく林業関係者はほとんど歩かないところなので、渡辺さん実際に松本のこういう遊歩道とか行ったことありますか。

（渡辺）

私もほとんど歩いたことがないので、一部遊歩道というよりかは、上高地に観光をした際に、ちょっと足を延ばして歩いてみたっていう形はあるんですけど、歩くために観光に行ったっていう形ではないので、あまり私も遊歩道を利用した経験はないです。

（香山）

あとキャンプというのもあって、これも森林の中で、森林の入口的なところで触れてるんですが、私実をいうと日常がキャンプなのでわざわざキャンプに行くっていう生活をしないんですけど、どなたかこの地域でキャンプ…？

（小山）

最近そのキャンプという意識が大分変わってきてるなというのは、すごく思います。

私、塩尻に住んでいますが、近年そういった今どきのキャンプというんですかね、全部設備がそろっていて、私たちのようにそのキャンプで野営という発想ではなくて、野外ホテルのような発想のキャンプ場というのができているのかな。

その中間が車で行って泊まるようなオートキャンプではなかったかと思うんですが、そういったものが、本当に自然の入口なのかっていうと、現実に使っている方を見ますと、そこへ来て、確かに森の中で夜は過ごすが、次の日はまた車に乗って移動する、自然の中で何かそういう森林での何か体験をするといったことはなくて、というのがあるので、単にリゾートホテルが森の中に存在するというレベルなのかな。それが、一般的に自然との触れ合いという言い方をするんですけど、何か若干違和感を感じるというのが現在のキャンプではないかと思っています。

（香山）

自然の中に行ったからといって、果たして自然と、或いはその森林と触れ合っているかどうか、そもそもキャンプ場にしても遊歩道にしても、そういうものが整備されていないんですよね。公園的なところに行くと、木の名前の札ぐらいは付いてますけど、でもそこから一歩踏み込んでいくっていうと、なかなか難しいことだし、ましてそれを活用するようなプログラムが日常的にあるのかっていうと、ほとんどない。

一方で公民館の行事のような形では何かしらあるかもしれないんですが、今回サッと情報を集めることができなかったということからわかるように、一般的に、スケジュールでこんなのありますよって案内が来たときに初めて知るんであって、何か森林に関わりたいなと思って探しても、そういうものはほぼ見つからないんだろうなってそんな気がします。

三木さんいかがですか？そういう一つの市民との接点として可能性があるなという仮説のもとに、考えてみたらキャンプ場と遊歩道だったんですが。

（三木）

私は例えばキャンプといって、実際野外ホテルのようなものっていうのも、構わないんじゃないかなとは思っています。

やっぱり人がそこに入り込むことが大切で、その入り込んで行く中で、いろいろと目につくこととか、気にかかることっていうのがあると思いますし、そういうのが今後の森林再生市民会議のようなものを作る場合に、具体的なニーズとして或いは具体的にこういうことやってみたいっていうふうなこととして現れてくるんじゃないかと思いますので、入口は広く取った方がいいかと、その入口になれるかどうかっていうところが大切かなと思っています。

（香山）

公共的に設置されている、或いは民間で設置したものも含めてですけれども、森林に入って行くっていう場合に、最低限の安全性っていうのは確保されているはずだと思ってるんですね、そういう点で言うとキャンプ場であれ、遊歩道であれそういう施設があるということは少なくともそこの周囲の森林に関しては、めちゃくちゃに倒木があるとか危ない、どこか崩れそうとか、そういうこ

とはないんだろうと思うんですが、そのための整備というのを事業としておそらくやられていると思うんですが、少なくともその始めるときはそうですよね。

おそらく維持管理の中でも行われてると思うんですが、それに市民が参加してるっていうような形ってのは、松本市の場合あるんでしょうかね。

私が知っている安曇野市の例でいうと市民参加型のそういう遊歩道的というか森林と触れ合う場所の整備っていうのが実際、市の事業として行われてますけれど、その辺は森林環境課の方、何か分かりますか。

（事務局）

市民参加型で遊歩道の維持管理をしているかという事例があるかどうか、事務局の方では把握してございません。私の記憶のある限りでは無かったと思います。

（香山）。

その辺もね、これからの松本市の動きの１つの課題になるのかな。

たまたま私の知ってる範囲で安曇野市ではそういう活動、ずっと続いてるところもありまして、おそらく松本でも市として把握できていないかもしれないんですが、いわゆる森林ボランティア的な活動をしている地域の活動がありますので、そこの中で、そこに関わってる人たちにとっては、森林に入りやすくする、触れ合うようなものっていうのがあって、それなりの成果もあるんではないかと思うんですが。その辺の具体的な接点を小山さん、いくらか持たれていると思うんですが。

（小山）

松本市内でも幾つかそういった活動、私の知ってる限りでは、寿地区と岡田地区が主体ではないかと思いますし、また、本郷地区もかなりやってると思うんですが、そういった地区においては、特に遊歩道の中を整備をされてきた地域というのは、やはり地区の皆さんが一生懸命　関わっている部分というのがあるのではないか。で、実際に遊歩道になっていない、その近くで山の整備をしながらせっかくだから、こういうところも歩けるほうがいいよね、っていう関わり方をして地域の皆さんが一緒に携わっている。　そこには当然行政が関わって、案内板の整備なんかもやられてるようなんですけど、そういう地区の整備があるというと多分そういったエリアになるのかと。そういうところではやはりグループの皆さんがかなり頑張っておられて、山の整備、それから、場合によっては資金的なもので企業さんの支援を受けたりといった形もあるようには聞いていますので、そういった地区ではいいと思うんですけども、そこに逆にどういうふうに一般の方が入ってくると面白いのかな。

場合によっては三木さんの方がコメントできるのかなと思うんでちょっと 1 回三木さんに振りたいんですが、

（三木）

今日、スライドの資料を若干用意してきましたのでそれを紹介させてもらおうかと思います。

前回宿題としていただいたのは、森林再生実行会議をやる中で、必要な書籍を出せるようにということを受けましたので。

一つは前回もご紹介しましたけど、「森林を活かす自治体戦略」という本があります。この本は長野県も含めて、全国の市町村のいろいろな市町村独自の取り組みを紹介したものですけれども、これはぜひ参照いただきたいなと思います。

重要なのは取り組みの内容そのものではなくて、取り組みの方法なのかなと。内容自体は森林の状態は全国、市町村によって違いますからそれ自体をまねることはできませんけれど、取り組み方法というのは参考になるかなと思います。それに関連して言うと、松本市がこれから、森林再生についての取り組みをする中で、県内の他の市町村にはどういう事例があるのかっていう情報を収集された方が良いかと思います。

先程おっしゃいましたように安曇野とか、あと塩尻もそうですし、伊那もそうです。いろいろなところで、市町村が独自に取り組まれていることがあって、それは松本の参考に大いになるかなと思っております。

もう一つが、これは皆さんには釈迦に説法なところはありますけど、わかりやすいところとしては、正木隆さんの「森づくりの原理・原則」というのがありまして市役所の皆さんにも推薦したい本です。

これは森林づくりを森づくりするときに、どういうことを避けるべきかと、いうふうなことが非常にわかりやすく書かれている本です。本は沢山あげてもしょうがないので、このぐらいにしておきます。

その次のページのところに書いておきましたが、私もこの間、松本市内で活動なさっている、市民の方に意見を伺いました。

一つは従来、松くい虫のことに関して気にかけておられた市民の方にもお話を聞きましたけれども、自分が森林との関わりが深くない方というのは、心配だということはあるけれど次の森林についてなかなかビジョンが出てこないという問題があるかなと思います。

具体的に次の森林のビジョンというのが出てくるのは実際活動されておられる方かと思いまして、お伺いしたのは財産区の活動です。

松本でも結構今頑張っておられる財産区がありまして、財産区議会の議員さんとそれから森林ボランティア団体が整備をされていると。これ、寿財産区ですけれど、企業の研修にも利用されているというふうなことで、どういうふうな活動をなさっているかというと、実際活動されているところに行って話を伺いました。それで次の松本市の次の森林どういうふうにしていったらいいんですかねっていう話を聞きましたら、そこにおられた方は例えば、ここに書いてありますように、アカマツと広葉樹が半々ぐらいの森林っていうのは、いろいろ取れるから楽しいというような話をされていまして、それは、アカマツと広葉樹半々がいいかどうかは別として、実際関わっておられる方っていうのは、次こんな森林にしたら楽しいだろうなっていうふうなことを意識されているということです。

次のページに、森林ボランティアのことに関して少し書いておきましたけれども、森林ボランティア団体の方にもお話を伺いました。ボランティア活動されている方に、一つの課題として紹介されているもの、言われるものとしては世代交代が課題であるというふうなことかなと思います。

全国で言えることなんですけれども、森林ボランティアの活動が盛り上がったのが 1990 年代ぐらい、その時におよそ 40 代ぐらいだった方々っていうのが、今は 70 代ぐらいになっているわけです。その下の世代というのがなかなか森林の活動というのに参加できてないというのは、色んなと

ころで指摘されることです。その原因として、若いと忙しいからねっていうのはよく言われることです。

もう一つ、松本市の特徴なのかわかりませんけれども、松本市民なのだけれども活動場所っていうのは市外にあるんだというふうなケースも見られました。

まず、これが伺った話の中でありました。

次、どうしていくのかっていうとですね、こんなこと言っておられました。アカマツが松枯れ対策で、更新されていきますよね。

そうすると、次の森林っていうのを、枯れてしまったところには育てていかなきゃいけないんですけど、その次の森林もですね、ほったらかしておけばいいかっていうとそうじゃなくて、やっぱり人々が入りやすい森林になるためには、例えばその次の広葉樹ですね、そういうふうなものも、結局誰かがどうにかして綺麗にしていかないと、親しみやすい森林にはならないんじゃないかということを気にかけておられました。

これも実際に、森林の活動されている方ならではの知恵かなというふうに思います。

次のページなんですが、市民と森林との関係を考えてみますと、松本市の人口は少なくないですから、人間はいるわけですね、人はいると。

先ほど言ったソロキャンプですとか、いろいろな形でのその森林を利用して、何かしたいというニーズもあるし、松本市の将来のことを考えると、やっぱり森林は欠かせないんだという点でニーズがあると、場所もですね、財産区の活動をやっておられるように、ないわけではない。

先ほどの、遊歩道の周りだってそうだと思うんですけど。場所はなくはない、場所はあると。

ただですね、この両者が十分に結びつけられていないのではないか。これは 1990 年代ぐらいは、一時期結びついていた時代はあるけれども、この結びつきってのは継続していかないと若い人が入ってこないんじゃないかなというふうに考えます。そこの一番下に書きましたけれども、これから松枯れ対策をしたところっていうのは、若い森林になっていくわけですよね、若い森林のところっていうのが、新しい関係性をつくれる場所になるんじゃないかというふうに話をお伺いしながら考えました。というのは、現在松本市の里山の森林っていうのは利用されなくなって、もう何十年も経つので、結構その樹木自体が立派になってしまっている。

この立派な樹木に直接手を出すっていうのはなかなか難しいってなってきて、プロじゃないと、手が入れられないというふうになっていますけど。次に更新していった若い森林っていうのは、まさに、市民が一緒に面倒見て育っていくことができる、森林なんじゃないかなというふうに思いまして、松枯れっていうのは、森林の災害ではありますけれども、そのあと、一つの可能性として、新しい可能性が展望できるんじゃないかなというふうに思います。次のページお願いします。

これは林野庁とかが言っている森林サービス産業というものの図です。私自身は森林サービス産業という言葉はあんまり好きじゃないというかですね、市民が森林と関わるのを、すべてサービスとみなすのはどうかと思っているんですけれど、この図が非常に面白いのは、縦軸が森林に関わる仕事とか、生活とかっていうふうな、関わり方の差ですね。

横軸が、これは子どもの頃から青年期、壮年期、老年期という形で、ライフステージを表している、この中で表現されているのは、いろいろな形で、森林との関わりを仕事としての関わりもあるし、私生活としての関わりもある。幼少期から、年を取った後、というふうなところまでずっとその森林との関わりっていうのはいろいろな形で見いだせるじゃないかっていうふうに整理された

図で、それ自体は非常に意味があることかなと思っております。こういう図を見ながらですね、松本市ではどういうふうな展開ができるのかというのを考えれば、面白いかなと考えています。

すいません長くなりますけど、あと 2 枚です。

次のページのところに、ちょっと載せておきましたのは、この間、県の会議で伊那市の県の森林づくり県民税を使った場所として紹介されていたので写真撮ってきました。これは伊那市の上牧という区ですが、ここで何が行われてるかっていうと、ここの森林は、すべて私有林で、個人の持ち山が何人もいるところを繋げて、その中に子どもたちが歩き回れる道というのを作って、それをイギリスの制度に倣って「フットパス」というふうに呼んでいます。一番下のところに、長野県のグリーンインフラ推進計画ですか。資料あげておきましたけどそういうところでも、言及されています。

ここは子どもたちに冒険の森と言われている区画があって、子どもたちが小学校の帰りに遊ぶことができるっていうものを設けています。たまたま私たちが行った時には、小学校の下校時間になったんですけど、通りがかった子どもが、我々が何でここにいるのかは、子どもたちには当然説明してないので、ただ森の中に我々がいただけなんですけど、子どもたちが通りかかるときに、フットパスという言葉を使っていて、我々の耳に聞こえてきまして、非常に定着している。やはり 2030 年、2040 年を展望すると、その時にその森林のことに関して中心になっていく若い人たちっていうのは今子どもなわけですね。やっぱり小さな松本市民に対してどういうものを提供できるのかっていうことを考えていくべきかなと思いました。

最後の写真は、これも伊那市のこの会議でも何回か紹介しています、「伊那谷フォレストカレッジ」という伊那市の取り組みですけれども、これ先週の土曜日ですか、4 日前の催しです。伊那谷フォレストカレッジは全国から参加者が来ているんですが、オンラインで参加してるんですが、ようやく実際にその森林の中でいろいろな会議をしてみようじゃないかということで呼びかけたら、全国から遠いところは岩手からも来られました。九州の方からも来られる方いらっしゃいましたけど、全国から人が来て、この森林を使って、どういうことができるだろうかっていう会議を持ちました。我々も驚くくらい色々な方々が全国から来ていただいたんですけれども、ここに書きましたように、森林で何をするかっていうのは、行政が決めることはできないと思うんですけど、それは時代によって変化するし、個人によってニーズも違う。だけど、何かできそうっていう森林は、人を引きつけるっていうふうに思いました。その中で、色んな人たちが、これ何かできそう。この中で、何か面白いことできないかっていうふうな形で話し合うことが、実際にできる。そういう人たちが来るということで、これは松本の森林でも取り組めるというか、松本の森林がそういう場所になったら、ますます面白いんじゃないかなと考えています。すみません長くなりましたが、以上です。

（香山）

今スライドを見ながら、非常に興味深い説明をしていただいたんですが、実は YouTube の方にこのスライドの画面が映ってない状態でして、アーカイブでもこのままになっちゃうんですかね、せっかくいい内容のスライドでしたので、これもちょっと一般の方にもね、見られるような形できればと思っていますので、また事務局と検討したいと思います。

それで言うと配信技術上の問題があるんですが、今後ですね、ライブの方にこういうことを出せ

るような、ちょっと検討をしていきたいなと思ってるところですが、伊那谷の森林の話が出ましたけれど、松本の森林全然負けてないと思うんですが。

（小山）

今お話を伺いながらすごい面白いキーワードがいくつかあったかなと。何かできそうな森林ってこう多分いくらでもあるだろう。一方で、今回基本構想の中で面白かったのが、一番その市からいただいた資料の中で非常に興味深かったのは松くいになったら騒がれた。で、当然ながら松くいだからそういういろんな問題が出てきた。だから、逆に言うと松くいというのがある種何かできそうな森林と引きつけるキーワードだと。

で、そういうふうに言いながら、基本構想の中で、市民会議の中で出てきた意見というのが、松枯れだから、そのワードをキーワードにしていきますと、すごく特徴的だったのは、森林資源がまちづくりに活用されていないから松枯れなどが起きているんだということが市民会議の中でうたわれたというのがすごく面白いふうに感じました。というのは、通常考える松枯れが起きているから森が大変なんだという文脈ではなくて、松枯れという言葉がまちづくりに繋がっているんだと、どういうことかというと、僕らは森のことを考えてるけれども市民会議の皆さんの心の中にあるのは、やはり背景として風景としての森林が松枯れでおかしくなってきているから、これは松枯れが起きちゃってるのは自分たちのまちづくりに課題があるんじゃないか。その先にあることをキーワードとして、豊富にある森林資源をまちづくりに生かし切れていないという語り方をしている。

てことは、こういうふうに何かできそうな　松枯れという森林があって、僕らの生活につなげたときに、自分たちのまちづくりがどうも森林と遠いぞということがすごく如実に出てきている。それは多分先ほど渡辺さんの方が発言をされていた、もう少し身近にならないのかな、日常に溶け込むにはどうしたらいいのかな。ていうことは、すごいいいチャンスな話なのかもしれない。松枯れによって、木が若くなるから自分たちと一緒に育てられるよねっていう三木さんの発言もそうだし、その課題が長期的にまちづくりへどうつなげていくんだって意味では先ほど渡辺さんが言っていたもうちょっと身近にならないかというキーワードというのは、すごくいいお話ではないのかなというふうな気がしてまして。その辺のところが多分その様々な関わり方というところとくっついてくるのかなっていうのをすごく感じました。少し一言コメントだけ付け加えました。

（香山）

まさに森林が一つの松枯れということをきっかけに動き始めているってそういう状況ですよね。

その動いている中身として若い森林ができているという話もあったんですが一方で、松枯れ以外の森林も含めて、どんどん伐採して、木を出すということも進んできてるんですが、この辺のことがなかなかまだ、松本市、市民の中に、伝わっていないような気がするんですけど、木材に関わっていろんなことをやりたいってずっとおっしゃってるような渡辺さん実際に松本で、山で、松枯れで枯れた木も枯れない木も、あるいはそれ以外のカラマツも、どんどん伐採が進む様にはなってきてるんですけど、それが市民の側から見えるでしょうか。

木が伐採されてるんですけどそれが市、松本の中に暮らしてる人にとって、そういうことがわかっているのかあるいはそれが利用されているのかされていないのか。ていうことが、松本の普通の人々に伝わっているのか、その辺どうでしょう。

（渡辺）

二つあって一つが、山の景色の中で、市民の中では、伐採されているっていう意識があるのかなっていう部分。私、前森林に関わる仕事をしていたので、もう伐採っていう認識は木を切ったら、植え変えるっていう認識はあると思うんですけど、林業に携わってない方からすると、そもそも伐採ってなんだろうって、木を切るっていうのは悪いイメージの人もいて私の知り合い人でも木を切るっていうのが、循環っていういいイメージを持たれる方と、伐採イコール悪いみたいな、イメージのある人がいる中で、伐採っていう認識がどういうとらえ方をされているのかなっていうのがまず１つと。

もう１つは、伐採された木が活かされているのかという点では、私自身は、松本で切った木を松本の市民が使っているという意識はあんまり感じられないのかなと思いつつ、例えば、食べ物とかだと、皆さんすごいイメージがわきやすいんですけど、どこどこ産地の例えばトマトとか、どこどこの里山で作った誰々さんの卵とか、キャベツとか、そういったのはみんな興味を持たれてると思うんですけど、やっぱ木材に関しては、どこどこ産地とか、どこどこで切られたこの木っていう意識は、まだまだちょっと定着が薄いのかなって感じます。

（香山）

まさにその部分ですね、林業をやっている立場からすると、本当に地域で使われていないっていうことがよくわかるんですが、一般の方から見ると、そもそも山の奥で木を切っている姿もちょっと遠くて見えにくいし、松本市街地から見ると山は景色なので、そこで誰かが何かやっていることも見えない状態ですよね。

仮にそれがあったとしても、じゃあ松本の中で使われているか。松本で、実際製材所もありますし、木工業もあるんですが、なかなか繋がっていない。これも統計的な数字調べればすぐ出ると思うんですが、松本で伐採された木が、ほとんど松本の中では使われていないんですね、現実的に。製材する前に丸太の状態で市外へ、これは長野県全体の問題として言えば長野県外に行って、加工されたものが来る。ただ、長野県で加工されたものが、長野県に戻ってくる例もありますけれども、それが県産材利用って言われるんですけど、実際に長野県内の建築であれ、家具木工であれ、そういう世界に使われている木のほとんどは、国内であっても長野県のものではないんですね。それが現実で、そういうことも、あまり知られていないっていうことだと思います。

実は私、本当にその直接的な地産地消的な意味で、もうどこで誰が切ったかわかる木だけを使った材木屋っていうのを本当にささやかながら始めてるとこなんですが、そういうものがあったら本当に欲しいっていう方多いんですね。それが手に入らないというか、もうそのものがあること自体知らない。この辺の木は使えないんですよね。逆に言われたりしますね。でもそうではないんですね、使えるんですよね。ただ使う方法というか繋がるルートがどこにもなかったっていうことだと思います。そういう意味でいうと、まさにその松枯れでものすごい量のマツが切られていて、その使い方は、製材して木材として使うだけではなくて、チップにして燃料として使うとか色々あるんですけど、そういうことも含めて、すごく動き始めている。

そういう、チャンスが来てるんですけれども、それを一般のこの地域の人たちにつなぐチャンネルがない、そういう気は非常にしますね。

せっかく、市の方から提供していただいた、もう一件の話があってそこにちょっと話を飛ばした

いんですが、都市公園の話が出てきました。都市公園とそれから街路樹というのがありまして、これも木なんですが、これの整備の中で多く大きくなりすぎた木を切らなきゃいけない事態に入っていまして、それの伐採の事例があるんですが、これもですね、実はちゃんと聞いてないんですが松本市として、市内の都市公園で伐採された、管理上伐採された木をどのように利用しているかということをおそらく把握してないんじゃないかと思うんですが、その辺の情報は事務局の方はありますか。

（事務局）

街路樹ですとか、都市公園の木をどのように処理されているかということなんですが、先ほど資料でもお示ししました数ある公園がございまして、そこには木が多く植えられております。実際剪定ですとか、高木になると上の枝を切ったりということで、市から委託をしてるんですが、どういった方向で、どこへ流れているかっていうことは、ちょっと存じ上げておりません。

（香山）

実をいうと、日本全国そうなんです。つまり公園管理とか街路樹とかの木というのは、そもそも資源だというふうに捉えられていないので、概ね廃棄物として扱われていくということで、片付ければいいと。発注の内容もそうなってまして、その先のことわからない。

ということになってるんですが、実は最も身近なところにある木なんですね。これを何とかしようという活動が全国で少しずつ始まってるんです。

そういう点で言うと、松本の森林そのものではないんですが森林に繋がっている都市公園、松本の都市公園の規模はどのぐらいなのか、他と比べてどうなのか、こういうことも、色々検討していくと面白いと思うんですけれども、最も身近なところにある木材っていうのが、実は非常に使いにくいっていうことがあると思います。実は公共のものではなくて、一般の家庭、個人の住宅にある、大きくなりすぎた木を伐採すると、いう仕事も非常に増えてまして私どもも関わっているんですけれども、ほとんどの場合は、持ち主さんは、片付けてくれればいいということで、切った人も早く処分をしなきゃいけない、置いておくところがないので、ということで産業廃棄物になってしまうっていう例が非常に多いんですね。

そうならないために、そういう木をなんとか救い出して使っていこうという活動も、本当に細々ながら私もやってるところなんですけれども、そんなところも今後、市民と松本、松本に限った話ではないですが松本で言えば、市民と、木とか、森林と関わっていく一つのチャンネルになるのかなというふうに思ってるところです。

その辺について何かコメント的なこととかありますか。

（小山）

実は昨年なんですが、松本市内の社寺林、特に神社ですね、神社の林というのを調べたことがございます。で、どれだけ松本市の木が大きくなったのかということを含めまして、30 年ほど前だと思うんですけど信州大の先生が、松本市の社寺林を調べたというデータを、発掘しまして、その 30 年後に同じ神社に行ったと。

そうはいってもその神社は全部の木を当時調べたわけではなくて一部だけを調べていたような

ので、どこが調べたのかわからないもんですから、ぴったり一緒だよという話にはなってないんですけれども、当時の記録と今回私の方で調べた記録を見ますと、30 年経ってると大体どこの神社に 30 センチぐらい平均で大きくなっていると、30 年前ですと 50 センチメートルの木を見ればびっくりしたんですけれども、今は 50 センチの木が当たり前に 1 メートルの直径の木も平気で出てくる。で、もともとはそういった社寺林というものは、本来地区の氏子さんたちが困ったときの財産として育てていたものはずですから、植えてある木なんかを見ますとお金になりそうなケヤキであったりスギであったりヒノキという、お金になる木がいっぱい植えてあった。それを将来何か困ったときに財産として売ろうというふうにやってきて育ててきたものが、いっぱいあるなと、わかった一方で一部の神社当時、社寺林があったよっていうところに行って、切り株しかなかったというところも、二、三見ております。

それも、やはり小さな祠があるようなところですとそういったケースが多かったものですから、この木どうなったのかなっていうふうに思いますけど多分先ほど香山さんが言われたような形になってるかな。

そうすると、都市公園という、逆に市で管理するもの以外の現実的な街中の緑ということで考えていくと、結構松本市も厳しい状況にあるのではないかなというのを感じたところではございましたので、山奥だけではなくて、もしかすると街の緑という部分も、先ほどグリーンインフラという話が出ましたけどもそういった視点も、もしかしますと私たちと接点として見ていかないと森林再生、背景の森林に繋がらなくなっているのかなという気はいたしました。

また、その文化財の方で変わる中ではですね、文化財として育ててある木が、落ち葉がでてきて困るという苦情もかなりきていると。松本市の公園計画なんかの最新のものをちょっと見たときには、そういった緑地が住宅の屋敷林やなんかが減ってきて、切られてしまうケースや、公園に指定した、保存樹木が切られてしまったことがあるというのも、市の中の記録に残っておりましたし、またそういったものが落ち葉で困るんで、何とかしてくれという要望もあるというのは聞いております。そういった、管理との中で、いや、大事だから多少は私たちも受け入れましょうっていう気持ちにどうしていったらなっていくのか、もしかしたらその森林再生の目指す姿に、合致するのかなっていう気がしながらちょっと感じたところでございます。

（香山）

林業の仕事の中に林業じゃない林業と言いますか、街の中の住宅で邪魔になった支障木の伐採、本当にそういう仕事が増えてる。その仕事が増えていて非常に高度な技術のいる仕事で、その技術を磨く人が林業の世界もどんどん増えてきてまして、街の中の木に関わるっていうことが増えている。

松本のようなところって森林と街が連続してるので、都市の中に森林がある、あるいは森林の中に都市があるっていうのが本来の姿だったような気がするんですが、その都市の森林が、都市の樹木が、実はどんどん失われていく。管理上、例えば大きな街路樹って邪魔だからということで切ってを管理しやすい小さいものに変えていくとか、そんなことが結構起こってるんじゃないかな。

これもきちんと調べればわかる話で、例えば、20 年前の写真と、今の写真を比べる。それだけでも、色んなことがわかると思うんですけれども、そういう都市の緑、グリーンインフラっていう中での樹木、それが連続して、周辺の森林にも繋がってるので、その辺もこれから、視点で特に、い

わゆる林業関係者じゃなくて、一般の多くの市民が関わってくる接点になるんじゃないかなっていうふうに思って、そんな話題も振ってみました。

残り時間があと１時間ぐらいっていうことで、少ない時間なので、前回同様、休憩なしで、突っ走っていこうと思います。

今回の実行会議に課せられてる課題というのは、提言に対して具体的に、今後どういうふうに何をやるかということになっています。

その中で、いろんなことが項目にあって、それなりに、これについてはこうしましょう、これについてはこうしましょう、ということを上げていく必要があるんですけれど、すべては難しいし、重点的にどこからっていうところがあるんだろうなと思っていて、そういうことで言いますとやはり、今後どうしていくかっていう中で、組織と人材、という項目があります。

そこの中で、先ほどちらっとすでにお話、言葉としては出てきたんですが、市民参加の森林再生市民会議（仮称）ということを提言の中で出してまして、これがどんなものであったらいいかということは、多分、今年の私たちの実行会議にとってかなり重要なテーマなんだろうなというふうに思います。これについて、実はその三木さんが紹介していただいた本の中に、全国でいろんな事例があります。

すぐ近いところでいうと安曇野市にもあるんですね。そういうものを学びながら松本市の状況の中で、果たしてその森林再生市民会議（仮称）ですが、どんなふうな建てつけで構想していったらいいのか。私が一つ考えているのは、こういうふうにやりましょうって、いきなり出して公募しますといっても誰も来ないと思うんですね。なんかもうちょっと市民が参加するっていうことを作っていくためにはその準備というもの、もしこの市民参加も何かしらの活動を来年度から始めるんであれば、もう今からそういうことを目指して動いてますよってことを発信していかなきゃいけないし、どういう形だったら参加しやすいのか、どういう人が参加すべきなのか、どんな形を作ったらいいのかということを、オープンに議論していく段階に入ってるなというふうに私は思ってまして、そういう点でこの会議がオープンなことの意味ってそこにあるんですけど、その辺について、実際に色々調査もされている三木さん、どんなふうな視点で思われていますか。

（三木）

結構難しいなと思います。

方法としては、こういう市民会議という様な形をやる中での会議に参加する人は、一つは公募で来てもらうという方法がありますし、もう一つこちらからある程度指名をする、例えば森林所有者、よくあるのは森林所有者の代表と、何とかの産業界の代表の人みたいな形で、こちらから指名するってのがありますよね。

あともう一つの方法として最近取られているものとしては、無作為に抽出するっていう方法もあるんです。ただ、いずれにしても、その人を呼んできたところで、すごい話が盛り上がるかっていうと、なかなか難しいところがあるかなと思います。

それは、生活にすごく直結したものでないテーマなので、森林というのは。明日の生活に関わることでなければなかなか色々なアイデアが出てこないかもしれません。

そういう中で、私が市民会議をやるとなったら入れた方がいいなと思っているのは、一つは先ほど、前回も申し上げましたけど、若い人たちですね。高校生だとか、そういう人たちを入れて、や

っぱりこれからの森林を使っていく側の人を入れていきたいなと思います。

あと、山岳フォーラムのような松本市が開くいろいろな森林に関する学習会がありますので、そういうところで学んで、いろいろな、こういうことをやってみたらどうかっていうアイディアを持った方を。森林再生実行会議が、市民に対して、次の市民会議の方を公募しますってやっても駄目なので、現状あるいろんな講習会の中で、次の市民会議というのを作るので、ぜひ参加してもらえませんかっていう形で今から言っていくっていうのが面白いんじゃないかと思います。今のところ思えるアイディアはそんなものですね。

（香山）

我々の中でもぽんぽんアイディアが出てこないその状況が、まさにライブとして面白いところで、つまり、すごく大きな理想的な姿として、地域の森林づくりに市民が参加していった方がいいねということで、この間の提言の中に、市民会議って書かれてるんですけど、でもそんなことって果たして松本で出来るんだろうか、そこは今我々のいる立ち位置だと思うんですね。

そこをはっきりしていく、そこから組み立てていくということがまさに今、私たちにやらなきゃいけないことで、これはこの 4 人でできることではなくて、森林環境課の皆さん、事務局の方もそうだしこれを見ている方、ここの会場に来ている方、YouTube で見ている方、全部含めてですね、つまり YouTube の方ってことになると松本市民以外の日本全国の方も含めてなんですけれども、市民が参加する森林づくりって、そもそもどうやったらできるのか、そんなことできるのか、というそこの部分からの話になるんだと思います。

ただそれを絶対やったほうがいいというのが、この間の提言の中で言っていたことです。

なぜそう言ったかというと、森林のことっていうのは行政がやること、或いは林業の人がやること、森林所有者がやることって、何となくそういうイメージがあって、だから物事が進んでいかない。

一方で、ものすごい金額の税金が使われています。つまり、木材の売り上げで森林管理ができない時代で補助金という形で、或いは直接の森林整備、治山事業、そういう形で公が使われてる。そこに政策として、実際に立法的に関わっている議会も、そもそも情報が無いので、今後の予算つきましたよ、賛成ですか、反対ですか。う～んて感じで通っていくと。

ただ、これも、たまたまその松枯れの問題に関しては、非常に大きな議論を生んだので、ぐっとクローズアップしましたけれども、それ以外のことについておそらく主な課題になったことなんて無いですよね。

それを少し前に出してくっていうことができたらいいなっていうのが、提言を取りまとめた立場。

私自身が、多くの文章の中でも、去年の委員で分担して書いたんですが、市民が参加する部分っていうのは主に私が書いた部分で、これをやった方がいいな。でもできるという確信を持って書いたとは言えないです。でもこれはぜひやったほうがいい。

そして、それをやろうとしている事例は、実は日本全国それなりにあるなっていうこともあるんで、そんなことを考えたところです。どうでしょう。そういうことがあったら今年の、このメンバーっていうのは私がやります。手を挙げたんではなくて、私も人選に関わりながらお願いしますってことで来ていただいた皆さんですけれども、来年以降、この市民会議みたいなものができるとしたら、こんなものだったら私は参加したいってそういうような事ってありますか。

（小山）

ずっとこういう会議が嫌なのが、なんか私自身今日、あえてスーツを着てきました。スーツを着てネクタイをしめて机に座って話をするというのは、森林の会議としては最悪だと思ってます。

いかにしてそれをやめようかと思ったときに考えられるのは、先ほど三木さんが言ってた山岳フォーラム、誰かの話を聞くということが本当に僕は一番いいのかな？というのも思っていまして。もしかすると、森林の会議なのに何で森林でやらないの。山に来てやろうよ。山に来てその場でみんな何かやってみようよ、雨が降ろうがなんだろうがいいじゃないか。その目の前に見える森林で何か考えようっていう、もっとイベント的なものでいいのかなと。

多分例えば安曇野市さん、伊那市さんといろんなとこでよく事例出てきますけれども、やはり僕ら松本市にだって松本市の森林があって、森があるじゃない。森の中で、さっき三木さんが言っていた何か出来そうな人を引きつけるんだったら、この森で何ができるんだろうかって考えていく。

そこから、別にどこの森でもいいと思うんですよね、だったらうちの森はこれができるよね、こっちの森はあれができるよねって言いながら、松本市、広いので、例えば、浅間温泉の旧本郷村のところだけではなくて、今度は安曇、今度は梓川、今度は南部といった感じで、市内巡回しながらみんな歩き回ってもいいのかな。

その都度、その都度どこかの森に行って、興味のありそうな人たちがみんな森の中に入って、自分たちの森ってどうやったらできるんだろうっていうのを繰り返していくと、結果として、じゃあそのために僕らは何ができるのか。

こういう会議ですと、多分事務局が後ろに今日も 10 何人っていう感じで、ずらっといますけれども私が好きなこと言ってるぞ、多分後ろで事部局の皆さんが。向こうで聞いておられる YouTube だとか参加者の皆さんは、あの委員と後ろの事務局が何かしてくれるんだという図式ができてくる。

ところがこれが森の中に来て、やってしまうと、言った以上お前何かできるのかい？っていう、ブーメランのように投げ返して、その議論の中でじゃあ俺がやってやろうかっていうのができていきますと、1 か所 1 か所の森が変わっていくきっかけができるのかな。そういう意味でも、現場におりてやるべきなのかなと。それができていくと、もしかしたら、じゃあ自分たちに何ができるっていうところに繋がっていくのかなと。

人によっては当然、いやもっと俺は森に来てもらうようにしますよって人もいるし、先ほど渡辺さんが言われたように、いや私はもっとそのまな板でいいから松本のやつを使いたいんだよっていう方もいらっしゃるだろうしという、それぞれの立場の中でやれることが出てくる。

じゃあこの森はそういうふうに使っていこうあの森はこうやって使っていこうというのができてくるのがいいのかなという気がずっとしております。せっかく遊歩道のマップもあるし、公園マップもあるので、先程香山さん言われたように、じゃあ今度はどこどこ公園で木を少し切らなきゃいけなくなったんで公園でやってみましょう。じゃあこの公園の木どうしようかっていう会議でもいいのかもしれない。という幅を広げていくと、それこそ本当の意味の市民会議になるのかな。

運悪く参加者が今回例えば選ばれた 4 人がそのまま引きずりこむようになってしまえば、この 4 人だけ来て誰もいないってことになるかもしれないけれども、それはそれでまた、仕方がないながらもやっていかざるを得ないかなっていう繰り返しなのかな。この 4 人がやって例えばどこどこの森はこうしましたって決めてしまったら、あいつら何やってんだってあとでお叱りを受けたらそこが次のスタートになるかな。そういう意味では、もしかすると私自身は春からというよりは次の春

からの動きというのは、そのための助走会議みたいなもので、動いていって、その結果として市民会議みたいなものと言えるような形に進化してったらいいかなという気がしました。

（渡辺）

市民会議の部分について皆さんのご意見もあったとおり、一番は、やってる人も外から見てる人からも、何かおもしろそうだなって思えるような部分にしたいなって思います。

先ほどスーツを着た会議をやってるのって面白くないんじゃないかみたいな話もあったと思いますが、私もそう感じていて、今こうやって机の上で会議してるのって、外から見たら、本当に何か誰かがやってるな、誰かが話しているなで終わっちゃうのが凄くもったいなく感じているんですけど。私たちのこの今時間を割いてる会議ってなんのためにやってるのっていうのは、やっぱり森と市民、人を繋げるために、みんなでどうしていこうかって考えたいからこういう会議を開いているわけで、やっぱりもっと、市民の声も拾っていきたいですし、松本市の方々が自分ごととして、森林のことを考える、ふれる時間を増やしていけるように、市民会議ではしていきたいと思います。

また、松本市の中では、高校もありますし、大学もあるので、若い方も比較的いる市だと感じているんですけど、先ほど三木先生もおっしゃったように高校生も巻き込んだらいいのではないかっていう話だったりとか、あとは、信州大学の学生もいらっしゃるので、若い人メインで、会議を決めたことを信大生の人にやってもらうとかではなくて、高校生とか信大生を含めてじゃあ私達こうやっていこうどうしていこうっていう会議を一緒に考えられたらいいなっていうのと。

あとは、松本市の中で、キーパーソンっていうか街の中心になる方もいらっしゃるので、そういった人も巻き込んで、森林に関わってる人だけではなくって、例えば市内の中で、飲食店とか雑貨屋さんとか、街のいわゆる有名な方とは違うけれど、中心の方々も一緒に巻き込めたらいいなって思っています。

（香山）

まちづくりの中にこの森林のことを入れていくっていうことができて、初めてその市民会議っていうものになるんじゃないかと思うんですよね。森林関係者、林業関係者がやることではなくて、市民にとって、どれだけ森林っていうのが、面白いものかですよね、大切なものか、価値があるのかって上から言われるのではなくて、自分にとって面白いっていう、そういうことを作る。それができる場になればなっていうのが、わたしも思うところです。

実際十分網羅的に調べたわけではないんですけど、少なくとも今まで私たちが感覚として思ってることでは、なにしろ今の日常と森林はあまり関係ない。だから森林に何かしら面白いことがあるっていう実感がわいてないっていうことですよね。だから、まずその本当のベースの部分を作らないと、例えば同じ市民参加で何か会議をやったほうがいいって言ったときに、例えばどうでしょうね、学校給食の問題だなんてなったらすごい注目集まるじゃないですか？子どもも親たちにとっても切実な問題だし、でもそれに比べたら森林ってすごく遠くて、多分そういうことで何か話ししましょうと言っても集まらないし、仮に集まったとしても、何の話しをしていいのかわからない。まず話題の基礎ができてないような気がするんですよね。確かに松が枯れた、これは共通であるけれども、じゃあ森林って何だろうか、何ができてるんだろうか、そういう本当に基礎の部分から作っていかないといけないのかなってそんな気がします。

そういう点でさっき紹介していただいた本の中に原理原則っていう本ありましたよね。

「森づくりの原理原則」です。これは専門書っぽい感じのものなんですが、中身はそんなに専門書でもないというか、でも、本来言えばもっと普通の人が読めるようなそんな本がそういう活動を通じてできてくれれば、森林に関われることの一つの入口を作っていけるのかな。

おそらく市民会議って言われるものが会議になっていくための、まず土台づくりみたいなことをやってかなきゃいけないかな、そんなふうに私は思ってるところです。そういう点で、この実行会議と呼ばれるものも、3 回会議室でやってますけども、いつまでもここの会議室でやってるもんではないなと。一応 YouTube も繋がってはいますけど YouTube って見られる人やっぱり限られるじゃないですか。

むしろ、去年も 1 回やってるんですけどあの時は松枯れというテーマがあったので、一番その松枯れの問題がホットだった四賀でやったんですね。あの時は広い会場に本当に大勢の方が集まって、かなり白熱した白熱しすぎたぐらいな議論になったりもしまして、やはりそういう場をこの実行会議としても作っていく必要があるなというふうに思ってるんですが。そのコロナの状況とかいろいろ難しい中ではあるんですが、その可能性というのを、ちょっと事務局の方に私も提言してまして、検討、どういう風にしようかって、まだそこより一歩前ですね、やった方がいい、ていうところまでは何となくあるんですけれども、やはり以降の活動にも繋がっていく中で、あと 2 回の会議、どんなスタイルでこれをやったらいいのか、ちょっとその辺のことも話をしてみたいのですが。

（渡辺）

市役所の会議室の中で、行われる会議じゃなく、外に出て木を感じられるところでやりたいなっていう部分もありますし、先ほど少しお話した街のキーパーソンの方々にもご協力をいただいて、今 YouTube 配信もされてるんですけども、森で会議を行うのもそうですし、街のキーパーソンが例えば飲食店とか、キャンプ用品の販売してる方とかもご協力頂いて。

それぞれが今回の会議の YouTube 配信をしつつ、そしたら、お店に来てくださった方々も、YouTube を見るきっかけにもなったりとかするのかなとも思ったり。

あとは、松本市の中でも、先ほど資料いただいた中でも公園も数多くあるので、公園を利用したりだとか、あとは松本市は観光地でもありますので、人通りの多い場所での青空で会議するのも、足をとめて聞いていただけるようなきっかけになるのではないかなと思います。

（香山）

つまりですね、どんどんやっていった方がいいっていうのがあって、今年度こういう形で、最終的にこの実行会議も何かしらのドキュメントを作るっていうことになると思うんですが、そこで終わらせないための仕掛けというのは、どんどんやるべきなのかな。

もちろん公の会議としてこういうものをやってますから最終的な報告の何かしらを作る、現実的にはたぶん報告の動画を作るなんていうのは無理なので。報告書というね、文章になるんですけど、でも、そこの文章を持っている温度というか、勢いっていうのはその文章に留まらないものでなければいけないなというふうにすごく思ってるところです。

それで今、渡辺さんのお話ありましたけど、とりあえずイベントって程でなくても、通りがかりの人も、ここも今日傍聴自由ですよと、言っても通りがかれないじゃないですか。この休日の

市役所なんて、入っちゃいけないようなとこですよね。

そうじゃなくて通りがかって入れるような場所を設定するっていうのもありかもしれないですね。まだまだこの会議というか、あと２回はやるんですが、今日残り 30 分の中で、もう、今日のこのこと自体もね、一応アーカイブが残るので、あえて、シナリオのない展開を今私が率先して始めてるんですけれども。

（三木）

将来的にその市民会議というふうなものを考えると、先程おっしゃったようにやっぱり会議室の中でやる会議じゃなくて、現場でやる会議なんだと思うと同時に、招集される会議でもないんじゃないかという感じがするんです。

この実行会議はしょうがないですけど、森林再生市民会議が、松本市の森林のあり方っていうのを考えていくっていうのは、会議をするから集まるんじゃなくて、会議になってしまうのが本来なんじゃないかなと、それ自身がその人々が、市民がですね、あんなことしてみたいとかこれが気になってるからなんとかしなきゃっていうふうな中で、人が集まれば会議になってしまうのが筋で、そう考えるとその市民会議っていうのが例えば年に５回やりますとか、３回目やりますっていうので、会議をやっていって最終的に何か作るっていう、そういう会議はちょっとまた違うあり方なんじゃないか。

それはひょっとしたら、山の中で、森林の中で、何かアクティビティーをする中で会議になってしまうという会議かもしれないし、森林の中で、私のいる南箕輪村だと森林の中に出店を出して、森マルシェっていうのをやってるんですけど、そういう何ていうか、催しの中で会議になってしまう、市民会議かもしれない。

そういうのを目指していったら、ちょっと面白いかなと言う風に今思いました。

それをどうつくっていくか考えなきゃいけないところなんですけど。

（香山）

そうですね。すごく面白いんだけどどうやってそれを仕切っていくのか、やはり進行役、ファシリテーターは必要で、やったことが記録されていくことも必要だと思うんですけど。

（小山）

山岳フォーラムだとか何かのイベントで、少なくとも市の今回で言えば森林環境課が関わるようなものに関しては、できるだけ全部じゃなくていいので、いくつかフィールドへ出ましょうと。フィールド懇談会みたいな形をとっていく、ファシリテーターがいるかいらないかは別としても森林環境課なりの、企画の中で、そちらで記録は残しましょうよっていうところまではできるんではないだろうか。

一方で、そこへの仕掛けをしていくファシリテーターに関して言えば、ある意味、三木さんが言われた召集される会議じゃないよと言いながら、ファシリテーターまでは召集しとかなきゃしょうがないかなと。現場でやれそうなものでファシリテーターがご用意できるものに関しては出てきた意見はできるだけ反映させましょうと、どういう形で反映させるのかといえば、こういう、今回いただいた要望一覧の中にもあるのは、市でこれやってくれっていうのが非常に多いっていうものを

どう脱却するのかなと思っています。

俺はこういうことやるので助けてくれよっていうのではなくて、こういうことをやってって言う、言えば市に対して要望を出し、市で何とかしてくれよってものを 180 度ひっくり返せるようなことをしていけば、市としてもやり易いというか、そうでなければ市がやる価値というのが逆にないのかなと。御用聞きのような形でやり続けているのであれば当然これから予算が厳しい折で、叶えてあげたいけど難しいよねってなってしまうと市としても動きがしんどくなるのかなと。いや、ここは俺らがやるからやらしてくれよと。

その辺の経営と四隅だけ助けてくれればいいよと。行政として管理していく上で助けて欲しいのはこれだけなんでやらしてくれやという意見を聞けるような会議になればいいのかなと、あとはそういう、意向を考えられるファシリテーターさんを何名か用意しといて、そういう人は常にそういう市の会議のどっかにいるようにして、流れをみながらそそのかしながら、人の連携を図っていく、それは市としての財源が確保できないものは正直に言いながら、じゃあどうやってやっていこうかっていうところに繋がってくればいいのかなと。

逆に言うと、現場でやるぜ、招集される会議じゃないぜ、会議になってしまう、この三つは多分重要なキーワードで、さらにそのときにそれぞれの地区の人が気になってることをみんなで話してみましょうっていう、コンセプトだけがはっきりしていて、こういう場面をこの地区とこの地区とこの地区で今年は企画しました。他の地区で、うちでやってくれという要望があれば直接森林環境課に言ってくれと。そしたらそこから考えますっていう流れができる。

昨年度は多分四賀の方でそういう松くいが大変だから困るよねっていう大きな問題もあったから、四賀でやるときには皆さんが強い関心を持っていろんな意見がでたということではないかと思うのでそういったチャンスを何回か作る。最初は空振りでいいと思うんですけども、それが市民会議に直接繋がっていくんではないかなって気はいたしました。

（香山）

森林環境課という形になってまだ間もないのでどんなふうな動きができるかということで、今回まさに市役所の方でも模索されてるところで。実は森林環境課は今この街中ではなくて梓川にあるんですね。そういう点でも全然雰囲気が違い始めているので、さらに言えばその森林環境課という役所自体、もっとフィールドに近づいていったら面白いなという気がしているところです。もちろん、役所ですから、ちゃんと屋根のあるところで仕事しなきゃならない部分あるんですけども、時には、屋根のないところへ出ていって、市民と関わるような、そういう活動を積極的にやっていくってそれは、是非、やっていったらいいのかな。

場合によったら市は、いっぱいキャンプ場を持っていますから、キャンプ場の中に森林環境課の出先の小屋が建ってるぐらいな、それぐらいまでいくと非常に面白いかなという気はしているんですが。

実をいうと私も関わっている中で、山岳フォーラムの中の山ゼミっていう企画の一部を、私が企画をやらせていただいてます。

山岳フォーラムっていうのは、どちらかというと登山の方ですね。岳都松本の登山の方に　関係するものとしてずっと開かれてきたんですが、これをもっと開いていこうということで、山というのをずっとおろしてきて里山っていうところまでくっつけてきて、そこの中の山ゼミという小さな

講座をいっぱい作るっていうのを、今年度から始めていって。

その中のまた一部として、100 年後の森林づくりを意識した、勉強会、講座みたいなものを全４回で今まで 2 回やったところですけれども、これちゃんと参加費を取ってお勉強しましょう、しっかり勉強しましょう型の講座なんですが、ぜひこれを続けていきたいと思います。そこまで来ると、どちらかといえば、内容的には、社会教育なんですよね。公民館っていうところが社会教育の一つの施設として公にはあるんですが、そこはそこなりのプログラムを持ってやってこられてはいるけれども、今のこの地域の森林の課題っていう風にフォーカスをあてたものっていうのは、従来の公民館活動の中にはなかなか組み込めないんで、それとは別に、全く新しくテーマとしては森林とか林業とか木材とかってそういうのを核にして、ただ一つの活動スタイルとしてむしろ社会教育活動的なものとして、公の予算をいただいてやっていく。そんなふうに、なれたらいいのかなと。今年度初めてやりながら、2 回やったところで、そんな立ち位置なのかなというふうにまさに今思いはじめているところで。

そういうものが一つの会議を発生させていく。それは小山さんのお話の中にもありましたけれども、そうなってくると非常に面白いことになるのかなっていう気がしています。つまりファシリテーター役というのはそこにいるだろうなと。とにかく基礎の基礎の部分がそもそもなさすぎるので、それでいうと色んなチャンネル、いろんなことが必要かなあというふうに思ってるんですが、渡辺さんのお話にあったようにその市街地のいろんなアクティブな、言ってみれば、まちづくりのフロントにいるいろんな色んな方たちがいてそこに若い人たちが出入りしている。それがこれから先のまちづくりの担い手ですから、そういうところでもそれなりの何かしらの仕掛けを作っていくのも非常に面白いなと思いました。

補足ありますか私この先まだちょっと言いたいことがあるんで、そこへ飛ぶ前に今のレベルの話で。

（三木）

現場で市民会議をやるという現場っていうのは、必ずしも森林の中じゃなくていいのかなと思っているんですよ。我々の業界だと、森林というのは森林法が管轄する森林であって、街路樹は森林じゃないっていう話、法律上森林じゃない形になるんですけど、人々からとって見れば別にそれあまり区別ないわけです。つぎ目がなくて、木一本から大きな森林まで、木の一つの連続としてあるわけですから、そういう中では市民会議が考える範囲っていうのは必ずしもその森林法上の森林じゃなくてもいいんじゃないかと思います。

そう考えると例えば先ほどの街路樹の話でいうと、街路樹に関して最近岩波ブックレットから街路樹に関する本が出てましたけど、観光都市として、夏場ここを人が歩く時に、何の覆いもないところで、暑い中、路地を観光客がさ迷うというのも可哀そうなので、そこは街路樹があった方がいいよねとか、そういうようなことっていうのは街の中でも、たぶん話になるかなと思います。

あと、樹木保存法の中でとか、或いは樹木保存法に準ずるような市町村条例で、保存樹林とか保存樹木というのを定めますよね。松本市も結構あるはずなんですけど、松本市は公表してなくて、長野市がどこにあるのか、位置してるのかっていうのを、マップ上で公表されてます。そうなるとそれをめぐって歩くっていうのを、市としては、観光としては一つある。

松本市の場合、井戸はマップになっていて、めぐることができるんですけど、樹木自体は、景観

の一環としての樹木としては、巡ることはできないようになっているので、例えばそれが井戸を巡ると同時に樹木も巡るっていうような形で繋がると、もう少し歴史を感じられるのかなとかですね。なんかそういうふうなことを、市街地の中でも会議ができるのかなと。

他にも例えば、松本市の観光の顔になるような場所でも、木質化できないかなとか。そういうふうに木質化したらもう少し外にアピール出来るのではないか、という形で会議の材料にすることが出来て。そう考えると結構話題に事欠かないというか、いろんなことが面白く展開出来るのではないかと思います。

（香山）

コロナおかげで、2年連続でクラフトフェアがなくなってしまったのですが、来年度はさすがにあるかなと期待しているところなのですけど、クラフトフェアはまさしく会議が発生しそうな場ですね。

ただ、今私が知っている限りではこのクラフトフェアに出ている工芸家達が松本の木を使っている例はほぼ無い位だと思います。つまり欲しい木が手に入らないのです。

でも、今から準備しておけば間に合うかもしれない。そんなタイミングなんですよね。

おそらくそのクラフトフェアを主催されている方はそういう視点はまだない。でも今日、この中で聞いている人がいるかどうかわかりませんけれども、松本市の森林についての何かしらをクラフトフェアの中でやろうよ。というのは今から声をかけていけば、間に合うことだ出来やしませんか。

そうすると、木工をやっている方たちが、松本にこんな木があったのか、多分そう言う。いや松本にそんな木は無いと思っていたと。いや山、行かないですよ。

これも変な話ですが。木工とか、大工さん工務店もそうですけど意外に山へは行かないのです。木材市場にさえ行かないです。製材されたものから始まっているっていう感じなので、そこ繋いでいく、やっぱりクラフトフェアはものすごいイベントじゃないですかね。日本全国から人が集まってくる。そこに繋がっていったら、それこそいろんな会議がそこから発生しそうな感じがします。

渡辺さんクラフトフェアはよく行きますか。

（渡辺）

1回行ったことがあるのですが、私も県外から移住して来たのですが、もともと松本に来る前はクラフトフェアというイベント自体を知らなくて、こちらに移住してから大きいイベントがあるということで参加したのですが、いろんなお店を出店されている方達や、作家さんが参加されていて、元々木が好きだったので、いろんな木があるなと。

例えば食器や家具やアクセサリーを作ってくださる作家さんがいらっしゃって、それに対して、市内でも県外の方でも興味を持って見てくださる方もすごく大勢いらっしゃるんだなっていう印象を受けたので、クラフトフェアに限らず木がもっと身近に、イベントだけというものではなくイベント以外でも木に触れられる方が今後も増えて行けばいいなと感じました。

（香山）

そういう木に触れる社会、木を使う社会、木を使う社会の仕組みを作るということを、キーワードにして活動しているところに私も入っていますが、まずそこのメンバーの作家では、本当に松本

っていうのはカラマツという視点ですけど、それを生かそうというそんなことをされている方もいて。ただ、なかなか松本のカラマツと繋がらない。なぜか。

これ、林業家の問題なのです。それと林業と製材のそういうところの問題で、やはり市民会議と言いつつも、森林にとって大きな力、影響力を持っているのは林業なので、そして松本地域、実際に林業の仕事をしている人も市民ですから、それを抜きにして考えて行くことはあり得ない話だと思います。

例えば、里山のことも、実際には林業の人が関わらないと出来ない。現実問題として、本当にプロでないとどうしようもないくらい木は大きくなっていますから。実際に、森林であり木材であり、関わっているのは、その道のプロ。林業者、或いはその製材所であるとか、それを加工していく、木工業、木材産業、そういうものがないと動かないという部分もあるのです。

おそらく政策的に言うと、森林環境課で担っている部分っていうのは林業の部分が非常に大きく、林業振興を抜きには政策づくりの市民会議ではないというふうに私は思っています。

それと普通市民との間には非常に距離がある。ここで林業関係の森林組合であるとか素材生産業であるとか、或いは小山さんのような研究者とか、三木さんもそうですけれど、そういう人たちが集まって会議したところに、ぽっと渡辺さんが呼ばれて入ったとしても、議論に参加できないじゃないですか。渡辺さんはかなり専門に詳しい方だけど、ましてやそうでない方の場合、会議に行ったところで、やっぱり前に進まないなあって思うのですよね。

一番やりがちなことで、いわゆるステークホルダーで話を進めていってもそれだけでは進まない。

でもそれが進まない一つとして、実を言うと、そういう専門家たちがあんまり市民目線じゃない。そこが問題なのではないかなと私は思ってる。いわゆる市民会議を、林業会社の昼休みに集まって弁当食べながらやっている雑談みたいなところから発生させられないかなって気はしています。

私自身その林業事業体に関わっていって、山仕事創造舎のスタイルというのは、お昼は皆で集まって食べるということをしている。それぞれ自分の車で食べるのではなく、そうするとそこでの雑談で、みんな林業のプロだから、やっぱり思いがあって、全然関係ない話よりは、つまり、サッカーや野球の話、芸能界の話ではなくて、昼間から休憩時間なのに仕事の話をするわけですよ。そういうものが、自分たちの現場の話ではなくて地域の話っていうものに繋がっていけば、これは林業のプロである松本市民の話になり、一つの会議になっていくと思うのです。

そういう仕方ですかね。

いかにその林業の現場、或いは木材リースと言う現場で、この仕事が地域の仕事であるってことを意識するような、そういう仕掛けっていうのですかね。それをやったら面白いなっていうふうに非常に思っているのです。

特に、林業関係がそういう点での組織としては森林組合、非常に大きな存在で森林所有者の共同組合ですから、組合員の方が非常に大勢いて、それはかなり松本市民の一定の割合の部分ですね。

特に市街地は少ないですけれども周辺に行けば、ほとんどの方が森林所有者イコール森林組合員なのです。

そういう方たちがそれぞれのフィールドで現実的に言うと森林組合というのは、いわゆる実際、木を切ったり、出したり動く作業、作業する人達の技能的フィールドになっているのですけれど、そこに所有者が必ず関わっている話なので、そういうところに、どういうふうに、自分たちの仕事を地域のことというふうにね、これで下ろしていくっていう表現はちょっと正しくない。どういう

ふうな感じならば自分たちの持っているその仕事としての枠を超えていくって言う、そんなことがどうやったら出来るのか、そういう場所がどっかにあればそれは、ひとつの市民からの政策づくりになるのかなという気がしています。

こういうことを言うと私が事業体の関係者だから、こんなことをまた余計なことって言われそうだけれど。よく地区説明会があるのです。森林所有者の方達を集めてこの事業やりますよと説明会をやる。

そこに、もしかしたら、ここのような視点で誰かが一緒に乗り込んでいって、「それぞれの現場でどんなことが話されているのか」ということを聞いて森林再生実行会議から来ました。そんなことを言わないで、むしろ黙って聞きながら、そこでどんな問題が出ているのかを拾い出してきて、それを今、松本のそれぞれの地区の中で森林、林業に関わる人たちが抱えていることは、こんなことかと拾われてくれば、そういうことをやらないとおそらく市民には繋がっていかない。

市民の方からそっちのプロの領域に上がってください。それは無茶な話であって、そんなふうに今考えていることで。

だから森林組合や事業体の皆さんには余計な話で、そんなことしなくても仕事ができるのに。わざわざ仕事にブレーキかけるようなことになるのですが。あえてそこはゆっくりやらなきゃいけない。「今年度の予算を消化しましょう」ではなく、実はそんな問題いっぱいあるのに、でも前に進んでいるという。日々の仕事としては、そこをやらなきゃいけないのではないかと思っている。

いろいろ形で、最近私はコンサル型の立場になっていますけれど、そういうところに相変わらず多いので是非そういうことを、プロ側から変化していかないといけないと思います。

はい。小山さん。

（小山）

多分、一番はそれがキーワードになるのだろうなと思います。

林業の人たちと、そうじゃない人たちの間の断絶というのは、実は林業をお仕事にしている人と、私や三木さんのような研究型の人たち、30 年も昔から言われているように研究者と現場が、ずっと会い入れない状態が続いている。どうやったら融合するかって話もあって、それが多分現場の皆さんと一般の皆さんとの間でもずっとあって、私自身が今本業で仕事をやらせていただく中には、「それをどうにかしてお前らつなげろよ」ということをよくやらせていただいた。

その中で山仕事創造者の皆さんは、かなり頑張って活動していただいております。けれども、その地域にどうやって自分たちが山のプロとして入っていくのか、山の中にこういう課題があるのを掘り出していけっていうのは、ずっと言わせていただいて活動していますけれども、

そういった中で多分まだ残念なのは、私自身はどうやってさっき渡辺さんに言われたようなまちづくりのプロプランナーとか、そういう人たちと、繋ごうっていうまで、山の人たち山側の人たちの意識が向いていないなっていうところが、もう一歩どうやったらこの人達が付くのかなっていうのは、実は本業からの悩みでもある。

そこがもしかすると市民会議を作っていく再生実行会議の次を作っていくうえでキーになってくるような気がしています。

ただ山側の皆さん、林業者とか製材所で働いている皆さんと、その人たちも町の住人なのだからまちづくりとどうコラボしていくのだっていうセンスにつなげていくことができる。

三木さんが言っていた現場って、あっちゃこっちゃだよね。僕もそうだと思っていますので。そういうところのコラボっていう意味では山側の人たちが講演に来てと、こちらが逆に言って若干召集してもいいのかなという気がします。山側を招集しながらそこで町側の人たちが好き勝手にものを言って、山側に文句を言う会議でもいいのかなと思う。

何となくそうしてくると香山さんが言われた部分と先程の議論で、接点は弱いがあるかもしれないという気がしました。

（香山）

もっと商売に近いところで言えば。木を使う人が山に買いにいくと、いう仕掛けを作るべきだと思うのですけど。どうですか。渡辺さん。前職ですごく山に近かったから、実際に丸太を買いに使う人が来るというそういう状況っていうのができたら面白いと思いません。

（渡辺）

そうですね。前職でも家づくりに携わっていたのですが、一般の方だとやはり木材を買うとか、丸太を目にする機会がなく、大きい丸太を見ると「えー。すごいね。立派だね。」、一般の方からすると丸太自体も非日常的な部分で接点がない部分だと思います。林業関係の方は毎日、木材とか丸太とか目にする日常的な部分なので、木に触れるという部分では機会が増えたらいいと思います。

（香山）

だから林業会社にとっては余計な話なのです。そんなことしなくたって、木を切り出すことで仕事になるのだけど、あえて、こんな木を欲しいっていう人が山に乗り出していくと、

これを個人的にやるとすごく大変なのですけれども、公共的には出来るのです。

つまり、公共施設を木造で作るということは、法律で推奨されていて、これから松本市の庁舎を建てるという計画を立てたときに、その実際の事業をやる担当者が、「絶対松本の山の木を調達するぞ」という強い意志を持てば、いろんな困難があるのですが、でも出来るはずで、まず、山主さんに相談して、とにかく、「ここの柱は松本の木だけで作りたいんだ」と山主さんに言うと、「なんだ、それは」と言われるわけですよ。別に木を切り出すわけではないから。でも「木を伐ってくれ」と木を伐る人に言うと、幾らで買ってくれるんだ。そういう話になるのです。

そういう経験をしていくことが、もう絶対必要です。松本市でそこまで徹底したことはやっていませんけど、すぐ隣の朝日村はそうやって村の役場を建てたのです。

そういう所がすぐ隣にあるので、そういうことをやっていく。それが一つのモデルになって、自分の家を建てる時に、或いは自分の子どもの机を、買うときに、そういう視点を持てる可能性がある。そんなふうに思っているので、まさにそういうことを推進していくということが、市民会議を作っていくことにはなるわけで、そんなことが出来ればいいのかなと、妄想しています。

これもシステムとして動かしていくことは、なかなか大変なことなのですが、でも単発でもいいから始めないとはじまらない。

その松本市がこれから先の大きな、構想の中で市役所庁舎をどうするかって言う話があるわけですが。松本市の庁舎なんかは松本の木を全然に使わないってことは、有り得ない話であり。どういうふうに使っていくのかちゃんとしたビジョンがないと、調達しやすいものということになると、

あそこの山から出てきた木を使う割合が、どんどんどんどん下がっちゃうのですね。

残念ながら松本には、そういう点で木材業というのは非常に弱くて、丸太が出てきても製材して加工してということが本当に弱いのです。

松本市じゃなくてもいいのではないか。その近隣にはある、塩尻や安曇野にはあるので、そういうところとも関わりながら、とにかく、松本市のこれから建てる公共建築の中に、国産ということではなくて松本市の木を使っていく。それをどうやったらできるのか。とにかく黙っていたら出来ないです。相当に動かないといけない。

そのためにもいろんな情報を発信していくことが必要で、結局のところ大変な仕事なのですが、市民がそれを望んで支えていけば、担当した人もそういう苦労もやる価値があるので、できるのではないかと私は思っています。

これ市長さんからトップダウンで言うことよりも、市民の方から、是非そうしなきゃいけない。そうしないことはあり得ないでしょうぐらい、そういうものを出しいくことも必要じゃないかなって思っていて。松本市にとって本当に直近の課題じゃないですか。

どういう市庁舎にするのか、「大きな新しいものを建てるのではない」と今の市長さんがおっしゃったのですけど。そうは言っても、今この会議を行っているこの建物自体がボロボロですから、これずっと使い続けるってことはやはり無理で、どこかで建て替えるってこともあるのではないかと。そんなことも思っているところです。

そういう点で、これから先の松本市のまちづくり、いろんなタイプの課題の中に必ず森林、木材というものがあり、やろうと思えばそこにどんどん入っていける。

そのための、何と言っても森林があるっていうこともすごいことで、森林が無ければ話しにならないですけど。現に森林があって、しかも、特に植林された人工林は本当に育っていて、それを利用していくっていう。まさにそのタイミングに来ているのでそういう繋がりを作っていければと。ちょっと林業木材産業側から見た、市民会議のあり方みたいなことを今日、思いつき、喋りながら考え、しっかりまとまってはいないのですが、そういう話をしていました。

是非、今回の実行会議の取りまとめの中で、それをどういう仕掛けで動かしていけるのかと入れていきたいです。

それを、あと２回の会議だけでやるとほぼ無理なので、もうちょっと日常的にお互いに勉強しながら、ちょっといろんな人の知恵を借りながらやらなきゃいけないと、今思っているところです。

残り時間が迫ってきたのですが、あと２回の会議をどういうふうに組み立てていくのか。

日程だけは決めました。それをどのように組み立てるのかってことを、ちょっと考えることは、ここでは全部決まらないのですが、絶対こういうふうにしたいっていうことを、お互いに出し合いたいと思うのですけど。どうでしょう。

（小山）

どうやって組み立てていくのかなで、やっぱり、今回出てきた重要なキーワードをどこかでパイロット側がやらない限りは、反省もできないだろうなっていうことだけは思います。だから、今日ずっと出てきたいくつかのキーワードのどれかを１回パイロットでやるべきだと思います。

香山さんがずっと言われていたように、他の人を呼ぶ機会を作りたいと言いながらこの４人で３回進んでいますので、どなたをお呼びすればいいのか。

例えばその林業の人たちに雑談めいてやってもらうというキーワードになったでしょうし、渡辺さんの方から言われているまちづくりのフロントランナーの方をお呼びするというのがあったでしょうし、市民の方となかなかそういう同じ舞台に立ってお話しするのは難しいのかな、という問題があったら。ただその人たちを入れない限り市民会議にならない。という当然の話もある。としたときに、4回目でも5回目でもいいと思うのですけども、その辺のずれはずれとして1回パイロットをやらないことには、僕らとしても「やってみました」がないことには多分答えにいかない。そこだけは見えている。今から4回目の時に、時間が合う人を探せというは酷だとは思うのですけど、理想的には第4回だと思う。

そこでのフィードバックをした上で第5回だからどうしようって、それが一番綺麗なのですがもし難しければ、この話をもう少し精査するのを第4回にまわして、その時に第5回に来ていただけるそういうパイロットプログラムみたいなものを、裏で動かしながらパイロットで5回目に仕掛けるかどちらかが必要だろうと思います。

（三木）

第4回？ちょっと第4回は日程的に難しいのではないですか。

例えば第4回ぐらいで、最終的には何らかの文章を作らなくてはいけないので。文章のたたき台を作る。そこで加えた方がいいものとか、その骨子みたいなものを第4回で考えてそれと並行して、第5回にパイロトをやると、そのパイロットのやつを反映するのは、第5回の後になっちゃいますけど。反映するっていう日程しか取れないのではないかと思います。

だから第4回は文章を作る骨子を決めていく。というような会議にすればいいのではないでしょうか

（渡辺）

第4回目が12月26日で残り1か月程ではちょっと期限が短いという部分もある。

無理強なのですが、間に4.5回を挟むことはやっぱり事務局の方と相談しながらとは思うのですが4.5回を設けて、これで回してみて5回でまとめに入るというか、その反省というのは、いかがでしょうか。

（香山）

おそらく去年のパターンでいうと、むしろ5回の延長戦という感じになるのかなという気がしています。

去年の専門家の会議も最終的に提言書の文章を作ることが、会議の場では間に合わなかったです。5回の会議が終わった後に延長戦という形で、実際に全員が集まるという形はとらなかったのですが、とにかく原稿を書き合い、それをお互いにまわして読み、まとめていくという作業をやりました。

そういう点で言うと今回の延長戦はしょうがないかな？

最終的に4回、5回と日程を決めていただいていますので、考えるとしたら次回の会議の時に、一応そもそもどういうタイトル、提言書と違う、何とか文章を、どのような骨子で作るかという話をして、そのうえで、それの一つのパイロットであり、こんなことやっていますということを、市

民に開いていくという意味でも、この会議室ではない公開の場でやっていく。野外かどうかわからんですけれども。冬なので寒い時はあるけど、そんなものをどっかで仕掛けていく。その成果の最終的な取りまとめに関しては、ちょっと延長戦で、やっていく、そんなスケジュールになるかなという気もします。

ここまでこの会議はどこに着地するのかと皆さん、特に事務局の方は、ものすごく心配されていると思いますが、そんな形で次回の会議になると何か最終的なドキュメントの形が見えてくるみたいですからご安心ください。

我々は、これからあと１ヶ月程度の間に、普段のコミュニケーションツールを使って、まずはこんな文章を書こう的な、こんな章立てにしよう的なやりとりをやってくということになる。それを持ち寄って、４回目の時にはもうすでにこんな骨子、章立てみたいなものが資料で、できているぐらいのところに行けるのか、そんなふうに思います。

またちょっと忙しい中、大変ですけれどもご協力いただきたいと思います。

そんなわけで、もう時間になりましたので、今日の会議の方はこれで締めたいと思います。

事務局の方にお渡します。

（事務局）

ありがとうございました。

今後の日程について、まず確認ですが、次回第 4 回の会議につきましては、12 月 26 日　日曜日、１時 30 分からということで、お願いいたします。

開催につきましては、屋外というお話もあったのですが、ちょっと年末、寒いということもありまして、また場所については追ってご連絡をさしてあげる。予定でございます。

（事務局）

すいません、ちょっと時間オーバーしていますが、ちょっと今日の会議に幾つか出てきた点で、私の方から情報提供と幾つかのお話をさせていただければと思っています。

はじめに、遊歩道整備のボランティアみたいなことはありますかということで、今ちょうど同時並行で、アルプス公園の北、アルプス公園みなさんご存知のとおり、昭和 49 年開園しています。開園部ということで南側のいくつかある施設です。その先に北側の広大な 42 ヘクタール程の拡張部と言われている部分がございます。その部分については、当時平成 19 年に広げた以降、本来は市民の皆様がボランティアというか、利用、整備、活用も含めて市民の方が参加するような形で、少し取り組み始めたところだったのですが、その後そういった形がちょっとできてないということで、今年度改めまして、「アルプス公園自然活用検討会議」というものを作って、今この北側部分にどんな整備が必要か、どんな活用が必要か、あとは改めて市民の皆様がどんな形で、利活用できるかということで、会議が始まったところであります。

またこの点についても同時並行で進んでいますので、情報提供させていただきながら、というように、少し今回の森林再生実行会議の議題にも関係してくるのではないかなと思っています。

また、ここには実は渡辺さんに、委員の皆さんをご紹介いただいて、渡辺さんのお友達が 2 人、このメンバーに入っていますので、またそんなところでも情報交換していただければいいのかなといったところです。

それからグリーンインフラのお話も少しでました。

これは街中の緑化ということで、松本もこれを宣言した中で、具体的にまだこれからなのですが、やはり松本は松本駅、それからお城、あがたの森、この三角ラインに街中の緑化というものが必要じゃないかということで、これは是非、具体的に進めていきたいなと考えているところでございます。

それから今、会議はこういった会議室ではなく外でという話もありました。実はクラフトフェアは今年できなくて、少し 10 月にクラフトピックニックという形で、少し小さめな形であがたの森で予定されていて、10 月の末だったのですが、この時にこの会も合わせて、何かうまく出来ないかと思ったのですが、結局そのクラフトピクニックも中止になってしまいまして、ちょっと残念だったのですが、このクラフトの皆さんとの関連、先ほど、まちづくりの人達とコラボということがありました。

クラフトの皆さん、こういった森林というような形、木材という中で、こういった繋がりというのは親和性があるのではないかと私も思っておりますので、そういった繋がりもちょっと事務局としても考えていければいいのかなと考えています。

それから山ゼミのお話も出たのですが、何か 12 月 5 日には、冬の森林浴ということで、アルプス公園でイベントが開催されるということで、本当に森林の関係って多岐に渡って、役所も本当に縦割り行政の悪いところがまさに出ているんだということで、横の情報共有ができてないという、この山ゼミの関係は、アルプスリゾート整備本部という違う部署でやっています。

それからアルプス公園の関係とか、そういった先ほど、グリーンインフラの関係は、建設部公園緑地課でやっていて、今回森林環境課ということでいくつも課がわたっているというようなこともありますので、少しその横の繋がりを我々、総合戦略室の方で役割を担ってやっていければと思っています。

以上、いくつか言いました。もし次回の会議ということで、先ほど事務局の方から少し紹介があったのですが、たまたまアルプス公園の中に、さっき言った北側拡張部のところに、森の入口休憩所というのがあるということで、少しアウトドアとか広いオープンデッキもある。そういった施設があるということでございますので、今後の会議も、こういったところでやるのが少し案なのかなと思って、事務局としても調査とか研究をしてみたいと思いますので、また調整させていただきたいと思っております。

ちょっとお聞きした中で思いついたところをお話させていただきました。

来年の市民会議の方向性ということで、着地点が少しずつ見てきて我々事務局としても少し安心をしているところでございますので、また引き続きよろしくお願いしたいと思います。

以上でございます。

（事務局）

事務局から補足ですが先ほど会議の中で、遊歩道の整備について市民との関わりということで、聞かれたところですが、山里に近いような遊歩道は、地元、地域住民の方が一緒に整備しているところもあります。それ以外、少し離れるような場所については、市で委託をして整備している、そういった場所もございますので補足をさせていただきます。

それでは長時間にわたりましてご協議ありがとうございました。これで第 3 回松本森林再生実行

会議を終了します。